楢崎皐月の生涯について

寺　石　悦　章

はじめに

筆者は別稿[1]において、楢崎皐月（1899-1974）に関する資料（書籍・雑誌・ウェブサイト等）にどのようなものがあり、それぞれが資料的にどのような性質のものであるかを検討した[2]。本稿ではその成果を踏まえながら、楢崎皐月がどのような人生を送ったのかを明らかにすることを目的とする。

楢崎の生涯について記した資料は多少存在するものの、年表風に紹介したものは簡潔過ぎて詳細を知ることができない[3]、多少詳しい記述がある場合には、いずれもが特定の時期のみを取り上げたものとなっており[4]、生涯全体にわたるものは存在しないという状況にある。しかも、資料相互の間で年代が異なっていたり、前後関係が食い違っていたりする場合もある。

楢崎の生涯について、最も豊富な情報を提供してくれる資料は、『相似象学会誌　相似象[5]』である。特に、楢崎の追悼号となっている[第 8 号]には、楢崎の生涯についての記述が随所に見られる。しかしそれは、「楢崎の生涯をたどる」という視点からすれば「読むに堪えないもの」といっても過言ではない[6]。そのためページを越えて、さらには号を越えて、随所に散見される楢崎の生涯についての記述を拾い上げ、それを年代順に整理するという作業が必要となる。その成果を示すのが本稿の目的であり、当然のことならが、利用できる他の資料は随時利用している。

なお本稿では、出典や原文を容易に確認できるように、主要なものについては敢え

---

1 [寺石 2010]。

2 特に重視したのは、それぞれの資料の内容が独自の情報か、他の資料の情報に基づいているかという点である。

3 [楢崎 2006]の巻末および、および[楢崎研究所ウェブサイト]の「著者略歴」など。

4 [深野 1993][船井 2004]など。

5 この雑誌については[寺石 2010]を参照。なお、第 10 号以降になるとタイトルが『潜象物理研究　相似象学会誌　相似象』となるが、本稿では混乱を避けるために『相似象学会誌　相似象』に統一する。

6 これは『相似象学会誌　相似象』の記述内容を非難するものではない。[第 8 号 : 82]には、次のように記されている。「一般常識に従い、彼の業績や生存の年表をつくる事も、私共は敢えてしなかった。そうした紹介のしかたが、彼に、全くふさわしくないと思われるからである」。そもそも[第 8 号]は、楢崎の生涯を年代順に記すことを意図していないということに他ならない。

て本文中（できるだけ文章の冒頭）に出典を明示するという形をとることにした。

1『相似象学会誌　相似象』の資料的性質について

すでに別稿[7]でも論じたことであるが、我々が利用することのできる楢崎に関する資料は少ない。特に、本稿で取り上げる「楢崎の生涯」といった、楢崎による研究以外のテーマとなると、『相似象学会誌　相似象』が、ある程度まとまったものとしてはほとんど唯一の資料になるといっても過言ではない。それ以外の資料が皆無というわけではないが、分量的にも、また記述の詳しさにおいても、『相似象学会誌　相似象』に勝るものはないといえる。従って本稿の内容も『相似象学会誌　相似象』に多くを依存せざるを得ない。

しかし『相似象学会誌　相似象』をそのまま利用することについては、不安な点もある。主要なものを2つだけ挙げて、ここで確認しておこう[8]。

1つは、『相似象学会誌　相似象』の事実上の筆者といえる宇野多美恵が楢崎と出会ったのが、楢崎が死亡するわずか4年前だったということである。しかも、楢崎が病床に伏していた最後の8カ月の間、宇野は家族から一度の面会も許されなかったという[9]。つまり宇野が直接知るのは楢崎の最晩年の 4 年間でしかなく、しかも最後の 8ヵ月は一度も楢崎に会っていない。当然のことながら、それ以前の出来事については直接の見聞ではなく、ほとんどが伝聞かそれに類する形で得られた情報ということになる。数十年前という話も多いから、話す側の記憶違いもあるだろうし、記憶が薄れることもあるであろう、また聞く側の理解が誤ることもあるであろう。実際、宇野が記す過去のできごとは時期や内容があいまい（あるいは不正確）なものが多く、不審な点も少なくない。

もう1つは、宇野が楢崎を「崇めている」姿勢が強く見られることである。楢崎を偉大な人物として記述するのは宇野だけではない。しかし宇野の楢崎に対する崇め方はかなり強烈なものとなっている。特に、楢崎の追悼号となっている[第 8 号]では、楢崎の死を嘆くと共に、感情をこめて楢崎を称えている記述が多い。このような姿勢が、事実を意図せずして歪曲してはいないか、そこまでいかないとしても極端な表現になってはいないかといった不安がある。

---

[7] [寺石 2010]。

[8] 楢崎の研究について明らかにしようとすれば、宇野が研究面（実験等）では楢崎の指導をほとんど受けていなかったらしいことが、最大の不安材料となるであろう。ただし本稿は、楢崎による研究内容ではなく、彼の生涯を対象としているので、この点での不安はあまり大きなものではない。

[9] [第8号：116]。この点については後述する。

とはいえ、このような不安がありながらも、『相似象学会誌　相似象』を排除しては、楢崎の生涯についての記述は成り立たないということもまた事実である。従って筆者は、以下の記述が必ずや正しいなどと主張するつもりはない。本稿が、より正確な事実が明らかになるための叩き台となることができれば幸いである。資料間に食い違いが見られる部分については、そのすべてを併記することを心がけたが、それも同じ理由によるものである。

2 誕生～渡満（1899 年～1942 年ごろ）

2. 1 誕生と家族

[第 8 号 : 120]によると、楢崎（誕生時は「丹野」）は 1899（明治 32）年 5 月 9 日に、母親の実家である山口県東萩で生まれている。半年後に北海道に帰ってから出生を届出たために、戸籍では小樽出生となっているとのこと[10]。

祖父・楢崎寛直は松下村塾の出身であり[11]、長野県令を頼まれたのだが、県令が単なる知事であることを知って辞表を叩きつけたという。大審院判事を経た後、羊毛の生産や大規模農業を行うために北海道に目をつけ、開拓事業に従事する。本宅の他に数ヵ所の別宅をもっていたという。

この楢崎寛直は、娘を友人の息子・丹野軍治のもとに嫁がせ、やがてその夫婦のもとに皐月が生まれる。従って、生まれた当時の名前は丹野皐月であった。しかし楢崎寛直には男子がなかったことから、丹野軍治が楢崎家を継ぐこととなり、丹野軍治は楢崎軍治に、息子の丹野皐月は楢崎皐月となっている。

皐月には、兄・治、妹・寿美子がいた[12]。兄・治は仙台二高から東北帝大に進学したらしく[13]、雷現象については「当時最高の研究家であった」と記されている。しか

---

10 [楢崎 2006]の巻末には、「1899 年　北海道札幌市生まれ」とある。また[ミキたんまい工房ウェブサイト]の「楢崎皐月氏のプロフィール」には「明治 32 年（1899） 5 月 9 日山口県東萩の実家にて出生、本名『サツキ』。北海道札幌市で育ち祖父の事情により上京する」とある。

11 [楢崎研究所ウェブサイト]によれば、楢崎の指導を受けて研究に従事した松原喜一は、「先生（楢崎のこと‥‥寺石注）は自分の素性は決して言わない人でしたが、僕は山口県の吉田松陰の松下村塾の教えを受けられた人なのかなと思ったくらいです。吉田松陰そのものでしたよ」と述べているのは、このことと関連があるのだろうか。

12 少年時代については数々のエピソードが伝えられているが、ここでは割愛する。

13 [第 8 号 : 123]に、楢崎皐月について「兄（楢崎治氏）と同じく、仙台二高から東北帝大に進学するつもりでいた」と記されている。

し雷現象の実験の際に死亡したという[14]。妹・寿美子は後に結婚して羽田寿美子となり、少なくとも皐月の晩年までは生存していたらしい[15]。

皐月本人は極めて壮健で、「晩年にも60キロを越える、立派な体格の持ち主であった[16]」とされる。

2.2 中学校卒業（〜軍隊生活）〜日本石油

[第8号：123]によると、楢崎皐月は中学卒業後、兄と同様に仙台二高から東北帝大に進学するつもりでいた。しかし受験[17]を終えた翌日、午後から体格検査という時に、松島で遊んだ際の船の事故のために遅刻してしまい、失格となってしまう。そしてそのまま上京して、日本で最初のレントゲンの研究者である河喜多氏なる人物[18]に出会い、彼が設立した日本電子工業の電気の専門学校に学ぶことになったのだという。河喜多氏なる人物に会ったのは、[ミキたんまい工房ウェブサイト]の「楢崎皐月氏プロフィール」によれば、1917年のこととされる[19]。

ただし[楢崎2006]巻末の「著者略歴」には、「1917年　中学校卒業後1年志願兵に応募し軍隊生活・少尉任官」とあり、「その後、日本電子工業の電気の専門学校に学ぶ」と記されている。もしもこの見解に従い、軍隊生活が1年間あったとすれば、中学校卒業直後ではなく、その1年後に日本電子工業の専門学校に入学したことになる。また専門学校入学は1918年ということになるだろう。

---

14 [第8号：115]。

15 後述するように、羽田寿美子は兄の晩年に彼を入院させるように家人に懇請し、家人に拒否されている。楢崎は「人事をつくして天命をまつ」の心境を告げたが、妹は「ちっとも人事なんか、つくされていないじゃないの？」と抗弁したというエピソードが伝えられている（[第8号：236]）。

16 [第8号：123]。

17 筆記試験という意味であろう。

18 この人物も、また彼が設立したという会社・学校もどのようなものであるか、筆者には不明である。この人物が日本電子工業を設立したとあるが、現在の日本電子工業株式会社は、1957年に日本電子株式会社から分社独立した会社である。日本電子株式会社の方も設立は1949年、その前身となる会社も1946年の設立である。名称が類似する日本電子専門学校の設立も1951年であり、いずれも1917〜1918年ごろには存在していない。

19 [ミキたんまい工房ウェブサイト]の「楢崎皐月氏のプロフィール」には、「大正6年（1917）　河喜多氏（レントゲン研究家）の知遇により日本電子工業・電気学校に学ぶ、日本石油で『絶縁油』開発に着手」とある。

[第 8 号 : 71]によると、楢崎は日本石油[20]と契約を結び、当時は輸入に頼らざるを得なかった特殊絶縁油を 20 代で開発し、事業化に成功している[21]。[楢崎 2006]巻末の「著者略歴」には、「日本石油と契約を結び 20 代で特殊絶縁油を開発、事業化する」とある。

[第 8 号 : 115]によると、楢崎皐月は兄・治と共に雷現象について実験を重ねていたが、前述のように兄はそのために犠牲となったという。また皐月も二度、心臓に 5 万ボルト、30 万ボルトの高圧電流を受けて失神している[22]。

2. 3 大日本炭油

[第 8 号 : 71]によると、1941～1942 年に大日本炭油で亜炭を原料とする人造石油を精製する研究を始めるが、この技術が軍に認められる[23]。[楢崎 2006]巻末の「著者略歴」にも、「1941～42 年　『大日本炭油』で亜炭を原料とする人造石油を精製する研究を始める」とある。

[第 8 号 : 71]によると、ある日、東北線平近くの原町[24]の彼の工場に、突然、首相であった東条英機[25]自らが楢崎のもとを訪れ、東条の懇請を受けたという。こうして、彼は満州に渡ることになる。

3 満州にて（1943 年ごろ～1945 年ごろ）

3. 1 製鉄試験所長？

[第 8 号 : 71]によると、楢崎は 1943 年に陸軍省からの要請を受け、満州の製鉄試験所長として赴任している。そして現地で、貧鉄から品質の高い鋼の製造に成功したという。また軍の特務研究に従事したとされる。[第 8 号 : 7]は、楢崎の肩書を満州における陸軍技術研究所長としている。また[楢崎 2006]巻末の「著者略歴」にも、「1943 年　陸軍省から要請を受け満州の製鉄試験所長として渡満。貧鉄から品質の高い鋼の

---

[20] 日本石油は有限会社として 1888 年に設立されている。後に日本石油株式会社となり、1999 年に三菱石油株式会社と合併し、日石三菱株式会社となる。2002 年に社名を変更し、現在は新日本石油株式会社。

[21] 上述の専門学校を終えてから、初めて本格的な研究生活に入ったとすれば、20 代とあるのは 20 代後半である可能性が高い。1920 年代後半のことであろうか。

[22] 時期ははっきりしないが、上述の専門学校を終えて以後、満州に渡る前のおよそ 20 年の間のことであろう。

[23] 楢崎が 40～41 歳ごろのことということになる。

[24] 「東北線平附近原町」とあるが、常磐線ではないだろうか。

[25] 陸軍の軍人。関東軍参謀長や陸軍大臣などを務め、1941 年から首相。

製造に成功。軍の特務研究に従事」とある[26]。

[阿基 1981 : 46]には、楢崎の娘の発言として次のように記されている[27]。「軍の内密の命令により、今でいう原子力—父は“質量勢力”といっていたが—その基礎研究のようなものをやるためであった。もっとも表向きは製鉄試験場ということで、貧鉄鉱から良質の鉄を精錬する研究なども行っていた。」これが事実だとすれば、楢崎は原子力を使った技術開発に携わっていたことになる。[阿基 1981 : 46]では引き続き、この点についての検討が行われている。そして住所などを手掛かりに、「楢崎の研究所に駐屯していた舞台は関東軍直轄の独立勤務第一中隊であることが判明した」としているが、「実際に原子力の秘密研究が行われたかどうかは不明である」という。

3. 2 イヤシロチ(？)との出会い

この時点で、楢崎はまだカタカムナとは出会っていない。しかし後にカタカムナの解読によって知ることになるイヤシロチという概念に相当するものを、体験から学んでいたらしい[28]。

[第 4 号 : 193-194]には次のように記されている。「そもそも楢崎が、このような意味の環境（イヤシロチ等のこと‥‥寺石注）の存在に、ハッキリと気付いたのは、終戦前、満州に於ける、製鉄研究の時代であった。当時、いくつかの異なる場所で、小規模の溶鉱炉で、実験的に製造していたところ、材料も技術も全く同じ条件であるにも関わらず、生産する場所によって、出来上がりに甚だしい差のある事を発見した。ある場所の製品は、いつも優秀であるが、ある場所のものは、不揃ひで不良品が多く出る。いくら検討しても、資材も方法も変らぬので、不審に思って居たが、ある日、ふと気がついた事は、いつも優良品を生産する場所には、周囲に、青々と樹木が繁茂して居るが、それに対し、きまって不良品を多く出す場所の辺りは、雑草も生えぬ一面の荒地だといふ事であった。植物の生育を活性にする環境には、製鉄の工程の上にも作用を及ぼす、何かの力があるのではないか？‥‥」

---

[26] [ミキたんまい工房ウェブサイト]の「楢崎皐月氏のプロフィール」には、「昭和 18 年（1943） 福島県相馬郡に亜鉛から人造石油をつくるプラント工場を設立するが、実用化以前に東条英機の悲願要請により満州吉林省河北の陸軍製鉄技術試験場の所長として赴任。貧鉄鋼から良質の鉄を作る研究の為の陸軍の製鉄所の建設地の決定の為に大地電気分布の構造を実測」とある。

[27] 楢崎の娘の名は後述するように寛子（広子？）だが、[阿基 1981 : 46]では「H子」と表記されている。[阿基 1981 : 44]には、楢崎の娘による証言は「武田洋一氏取材」とある。

[28] イヤシロチについては[寺石 2010]を参照。

[第 8 号 : 71]によると、満州時代、同じ材料で、同じ製法で作る鉄のできあがりが、場所によって違っていることに気付いていた。よい製品を出す溶鉱炉の周辺には植物が繁茂し、悪い製品を出すところは、周囲の荒地に雑草すら育っていなかったという。

[第 7 号 : 117]によると、楢崎の研究グループの中に、陸軍が企画した当時東洋一の製鉄所建設地を決定するために、大地電気分布構造を実測した技術者がいた。彼らは、作物の優勢生育地帯と劣勢生育地帯とが、一種の方向性をもって規則的に配列する現象を発見していたという。

3. 3 蘆有三との出会い

後に楢崎をカタカムナ研究に向ける伏線となった出来事といえるのが、蘆有三（らうさん）との出会いである。[楢崎 2006]巻末の「著者略歴」には、「1944 年　吉林・老子廟で蘆有三導師に会い老子の思想に触れる。ことにその宇宙観に深い感銘を受ける」とある[29]。以下では[第 8 号 : 85-89]に従って、楢崎と蘆有三の出会いについて紹介する。

第二次世界大戦中、楢崎は陸軍の製鉄所長として吉林にいた。当時、満州人の労働者については、日本人と対等に扱わないのが当然とされていたようだが、楢崎は彼らに対しても心を配っていたらしい。地元の娘々廟の祭礼の日、満州人の職工たちが祭礼に参加しようとすれば、午後の仕事を休む必要があった。しかしそうすれば、給料は半日分カットされてしまう。そこで楢崎は自ら娘々廟に詣で、彼らに供をさせたという。つまり娘々廟に詣でることを、仕事の一環にしてしまうという粋なはからいである。そうすることで、彼らにも一日分の日当を与えたという。また楢崎は、日本人として初めて多額の寄進をした。そのことにより、人々の信望を集めていた蘆有三という名の老師の部屋に招かれることになる[30]。

この時の、老師は自ら泉水を鉄製の釜に汲み、たった数枚の木の葉をもんで点火した。わずか数枚の木の葉だけであるにもかかわらず、その茶が非常に熱かったことから、楢崎は強い関心をもった。また、軍関係者もほとんど知らなかったドイツの V2 ロケットのことも、老師は知っていたというし、楢崎が訪れる時は、老師はいつも山

---

[29] [ミキたんまい工房ウェブサイト]の「楢崎皐月氏のプロフィール」には、「昭和 19 年（1944）　吉林で盧有三（90 歳位）老子教老師と会い古伝（日本の超古代文明）について知る」とある。

[30] [第 8 号]では、蘆有三を始めに「老子教道士」としながらも、その後「道士」という呼称は用いていない。また、住んでいる場所を「寺」と呼ぶなど、道教と仏教の混淆が随処に見られる。ここでは一応、蘆有三を「老師」、住んでいる場所を「寺」としておく。

門の所で迎えに出ていたという。ある時など、楢崎は敢えて裏山の方から行ってみたのだが､すると老師は裏門で待っていたという不思議なエピソードが伝えられている。

驚くべき識見と人格の高さ、さらには不思議さなどに打たれた楢崎は改めて入門を乞い、敗戦で引き上げるまで親交を結んだ。両者は最初こそ通訳を介していたが、その後は石板を使った筆談によってコミュニケーションをとったらしい。その中で老師は楢崎に、上古代の日本に「アシヤ族」という高度の文明をもつ種族が存在していたこと、彼らが「八鏡の文字」なるものを創り、さまざまな生活技術を開発していたことなどを語ったという。常識に反することであったが､これまでの経緯もあったため、楢崎は老師を疑わなかった。

[第 3 号 : 8]には次のようにある。「楢崎はかつて在満当時、シナの老子教の道士の間に、老子の言葉として、『日本の上古代に、アジア族が存在し八鏡の文字を使ひ、特殊の鉄をつくり、高度の文明をもって居た。それが神農氏らによって伝へられてシナの文化のもとになった』と、秘かに伝承されて居ることを、蘆有三老師より直接聞いていたので（中略）爾来 20 余年を、その解読と、内容の追体験に従事したのであった。」

3. 4 終戦と帰国

[第 8 号 : 71]には、楢崎は戦争で多くの部下や、唯一の息子を失ったとある[31]。

[第 8 号 : 87]によると、蘆有三老師は、日本の敗戦の混乱の中で、行き倒れた多くの日本人を寺内に葬ったという。また楢崎らの帰国のために、配下の満州人を動かしたり、食糧や金品をまわしたりするなど、力を貸してくれた。

帰国後、楢崎は謝意を伝えようとしたが、廟の主は変わっており、その消息はわからなかったという。

[楢崎 2006]巻末の「著者略歴」には、「1945 年　帰国」とある。

4 化成会とカタカムナ（1945 年ごろ～1960 年ごろ）

4. 1 終戦直後

終戦直後の楢崎についての情報は、ほとんどない。

[第 8 号 : 10]によると、終戦直後に楢崎は、彼を頼ってくる部下たちを収容するために、習志野の軍用地の払い下げを受け、農業をやらせていた。そして故郷と連絡のついた者の土地は楢崎が買い取り、帰郷のための費用として持たせていたという。

4. 2 星一と化成会の結成

[31] 名前は朝弥と記されている（[第 8 号 : 120]）。

やがて楢崎は星一という人物と出会う。このことにより、再び研究生活に戻ることができたらしい。星との出会い、また彼からの援助を受けた時期については、『相似象学会誌　相似象』を始めとする多くの資料が「終戦後」のような書き方をしている。しかし[ミキたんまい工房ウェブサイト]の「楢崎皐月氏のプロフィール」によれば、星一の援助を受けたのは1945年8月13日のことだという[32]。

戦争中、どの国でも軍隊は国内の（時には国外の）最高の技術者たちを招き入れ、厚遇していた。技術者相互の関係については不明な点が多いが、最高の技術者たちが協力し合う体制が作られていたらしい。そして楢崎は、そのような技術者集団のリーダー格であったと見られる。

しかし戦争が終わると、そのような技術者たちはいずれも任務を解かれることになる。要は失業であり、日本が誇った技術者集団は必然的に解散に追い込まれ、優秀な技術者が次々アメリカなどの戦勝国に引き抜かれるといった状況があったという。

このような状況を憂いていた人物の一人が、星製薬の創設者で、星薬科大学の創立者、さらに衆議院議員と参議院議員の双方を務めた星一[33]（ほしはじめ、1873-1951）であった。彼は楢崎を中心とする陸軍系の技術者集団を経済的に支援し、メンバーの離散を阻止しただけでなく、そこに海軍技術研究所長の徳永という人物[34]を加えるなど、一層のレベルアップを図った[35]。こうして誕生した新たなグループは化成会と称していた[36]。

---

32 「昭和20年（1945）　終戦の年の8月13日、衆院議員でもあった星一氏の援助をうけ、五反田の星製薬内に重畳波研究所を置く。旧海軍技術研究所の軍関係者や技術者と『化成会』創設する」とある。この記述が正しいとすれば、終戦（厳密には8月15日）以前のできごとということになるが、敗戦を見越しての申し出だったのだろうか。もしもこの時期に楢崎が帰国しているとすれば、帰国も敗戦後ではなく、戦争中ということになる。

33 1947年まで衆議院議員を務め、同じ年に参議院議員となっている。野口英世のパトロンでもあったという。なお、小説家の星新一（本名：親一）は彼の息子。

34 終戦時に海軍技術研究所所長であった徳永栄だと思われる。

35 [第8号 : 7]。なお [楢崎 2006]巻末の「著者略歴」には、「1947年　星製薬の創設者であり参議院議員の星一（ほし　はじめ）氏の要請により『新しい農業技術』の研究（戦後復興の一手段として工業用原材料の生産を主とした農業を拡大する為の『植物波農業』の研究）および大地電位の分布実測調査を開始すると共に重畳波の研究にたずさわる」とある。

36 [第8号 : 3]によれば、楢崎は1970年に文部省教育会館で行った考古物理学連続講演会において、化成会結成のことを述べている。なお[第8号 : 7]によれば、化成会の

4. 3 地下潜伏

楢崎を中心に新たに結成されたこのグループは、リーダーである楢崎のみが表に出るものの、他のメンバーは地下に潜伏し、研究内容も伏せるという方針をとった。このような方針をとった理由はいろいろあったようだが、その１つはメンバーの身の安全を考えてのことであったらしい。

[第８号 : 8]によると、楢崎たちは戦争で生き残った仲間たちと「無我協同体」を結成したという。ここでいう「無我協同体」とは、名を求めず、研究成果の対価を求めず、研究家としての能力を奉仕して、将来の日本に必要なものを造り上げ、やがて国家がそれを必要とする時には、その成果を無償で提供することを誓った、我の無い協同活動体だったという。このように誓ったグループのメンバーたちであれば、外国からの技術者招聘を拒んだのも当然だといえる。

[第８号 : 105]によると、こうした考えのもと、楢崎の第一の部下であり、かつては海軍の技術研究所の所長だった徳永という人物が、敗戦後にソ連[37]から声をかけられたものの、それを拒否したために殺されてしまったという[38]。こうした事件があって以来、研究グループのメンバーはいっそう用心深く地下に潜り、研究内容と自身の保

名称は「変化生成」の略だという。[楢崎研究所ウェブサイト]の松原は、化成会の「化成」について、「“生物の変化生成で成長する”という原語を略して名づけられた」と述べている。

[37] [第８号 : 105]には「ロシヤ」とあるが、「ソ連」に改めた。

[38] 事件は、世間的には交通事故として処理されたという。その後、楢崎は徳永未亡人に月々生活費を送っていたが、このことは一切、家人にも秘されていた。しかしその事実が知られるようになった際、思わぬ誤解を生んだとある（[第８号 : 105]）。ただしこの内容には、事実誤認が含まれている可能性がある。

前述の通り、「徳永という人物」は「海軍技術研究所所長」という肩書から徳永栄（終戦時は中将）だと考えられる。しかし彼は1974年まで生存しているため、「敗戦後」に殺されたという表現はふさわしくない。また松原は、楢崎研究所のウェブサイトに掲載されている話の中で、「その頃、化成会の仲間の方で人体波健康法の研究をしておられた海軍出身の医師の徳永さん、林さんと楢崎先生とがよくお話をしていたのを覚えています」と語っているが、この中の「海軍出身の医師の徳永さん」が本文中で述べた徳永である可能性は高い。松原が楢崎と初めて会ったのは「昭和28年（1953年）」と語っているから、その時点で徳永という人物（徳永栄ではないとしても）は生存していたことになる。楢崎の部下の一人がソ連によって殺されたということが事実であったとしても、殺されたのは別人だったのではないかと推測される。

全を自衛せざるを得なかった。楢崎自身もGHQから誘いがかかったが、「部下まかせの無能な所長」と思いこませたり、科学新聞の記事を「別人でしょう‥‥」ととぼけ通したりして逃げ切ったのだという。

地下に潜った理由は他にもあった。[第8号:6]には次のようにある。「私達が、研究途上の技術を金に換える方法はいくらでもありながら、用心深く、ひたすら研究内容を秘匿して来たのは、威力的な天然の利器が整備されるまで、その技術をストックする事が最も必要であり、それが、私達の軌道修正運動のポテンシャルを高める所以であると考えたからである。」

[第8号:10]によれば、国家や民間の援助を求めたとすれば、出資者に気に入るような過早発表をしなければならなくなる上に、研究内容は制約され、監視され、期限を要求されるなど、種々の問題が起きることを懸念したらしい。また研究内容のスケールからして、各国のスパイやマスコミなどを避ける必要もあったという。そのために楢崎は、資金の援助を他に求めず、自分ひとりが表に立って責任を負い、他のメンバーは地下に潜る体制が、研究遂行の安全を守ると判断したのだという[39]。

[第8号:82]には次のようにある。「彼のやり方は、研究テーマによって、グループの中から適当な担当者を決め、指示は与えるが存分に研究させ、彼一人が全体を総括し、必要以外に、メンバー相互の横の連絡はもたせなかった。(『能力の高い研究家というものにはヘンチクリンな奴が多くて、純情なんだがつむじ曲がりで、人みしりで、人づきは悪く、めいめいに意地やメンツがありますサ』と彼は笑っていたが)、優れた研究家にありがちの特異な気質を把んだこのような指導法により、彼一人が表に立ち、全責任を以って一切を呑みこみ、三十年間トラブルを起さず、メンバーの能力を最高に発揮させる事に成功し、最も能率よく研究成果をあげ得たのであった‥‥。」

4.4 農業技術の開発

[楢崎2006]巻末の「著者略歴」によると、このようなグループに星一が要請したのは、「新しい農業技術」の研究(戦後復興の一手段として工業用原料の生産を主とした農業を拡大するための「農業波農法」の研究)と、大地電位の分布実測調査の開始、そして重畳波の研究だったという。

---

[39] 楢崎が星の援助を受けていたことは[第8号]などにも明記されている。また[楢崎研究所ウェブサイト]の松原は、化成会について「大変な人脈で、政治家、大学教授、実業界の大物等、特に星製薬の星一氏は楢崎先生の財政支援された方ですが、そういうグループの方がここで研究されていた」などと述べている。このようなことからすれば、「完全に地下に潜伏した」とか「一切の援助を断った」ということでないことは明らかである。

[第 7 号：115-116]によると、楢崎のグループである化成会は、植物生育の基本条件である大地・大気の電気と植物の生存条件の関連、地球の気象条件、植物の電気生理など、天然自然の物性に関する理学的基礎研究に基づくものだったという。

[第 7 号：114-115]によると、星は全国の農業指導者の再教育を図ることを目的に、千葉県柏市にあった高射砲隊の跡地を校舎として農業技術学校を建設している。所長には「八木博士[40]」を、顧問には「和田工大総長[41]」を迎え、楢崎らを教師とし、各県から 2 名の知事推薦者を集めたという。ただしそれが何年のことで、何という名称の学校であったかなど、詳細は不明である[42]。

[ミキたんまい工房ウェブサイト]の「楢崎皐月氏のプロフィール」には、「昭和 23 年（1948） 星製薬を離れ、全国の大地電位の分布実測調査に踏み切る。（3 年間で 17,000 ヶ所） 」とある[43]。「星製薬を離れ」というのは、これまで拠点としていた「星製薬内の研究所での研究を中断して」という意味であろうか[44]。

[第 4 号：193-194]には次のようにある。「‥‥終戦後、全国をまわって、各地の大地電気を測定して歩き、実地の多数のデータにより、自然の地形の『相似象』に気づき、又、古代からの神社や、霊地等といはれる所や、又、農産物のよく出来る田畑などが、例外なく、非常に高電位である事を知ったのである。（そのような優勢知に住む

---

40 「八木博士」とあるのは、八木秀次工学博士のことであろうか。八木は東京工業大学学長を務めており、続いて名前の出る和田（和田小六のことだと考えられる。次注参照）の前任者だった。1946 年に大阪帝国大学総長となっているが、GHQ の公職追放指定を受けて辞任している。

41 「和田工大総長」とあるのは和田小六のことで、正しくは「和田東京工業大学学長」だと考えられる。

42 おそらく 1940 年代後半のことだと思われるが、後述する全国の大地電位の調査（1948 年から？）との前後関係ははっきりしない。とはいえ、高射砲隊の跡地を校舎としたという表現からも、戦後間もない時期だと推測される。また前述のように「八木博士」が八木小六だとすれば、彼が大阪帝国大学総長を辞任した 1946 年かその直後に、農業技術学校に着任した可能性が高いといえる。なお星は 1951 年に死亡しているから、それ以前のことであろう。

43 本稿**3. 2**でも述べたとおり、楢崎はカタカムナとの出会い以前に、後のイヤシロチに相当する概念をつかんでいたらしい。

44 もしも「星製薬の援助を受けない」という意味であれば、本稿**4. 6**で述べる私有財産の換金などの話とは矛盾することになる。また 1956 年ごろから研究グループに加わった松原喜一が星一の名前を出していることからすれば、星との関係が 1948 年に早くも終わっていたとは考えにくい。

人には長寿者が多く、反対に、電圧の劣勢地は、作物がみのらず、地形は荒れ、建物はいたみ、人体にも不健康地で、道路などは、いくら修理しても忽ち破損することが確かめられた。現在までの最高記録は、三輪神社)」

4.5 平十字とカタカムナ

新しい農業技術に関する研究を進めていた頃、楢崎に人生の転機といえる事件が起こる。平十字(ひらとうじ)によってもたらされたカタカムナと呼ばれる文献との出会いである。

いわゆる「超古代史」に関心がある人々によれば、日本には『日本書紀』や『古事記』などよりも、はるかに古い文献[45]が存在し、伝えられているという。しばしば名前があげられるものに、ホツマツタヱ、ウエツフミなどがあるが、現在はカタカムナもその中に含められている。ただし、これらの文献の多くと異なるのは、これらが広義の歴史書であるのに対し、カタカムナが科学書とみなされている点である。

カタカムナそのものにまつわる謎が多いのだが、楢崎とカタカムナとの出会いについても、常識では理解しがたい点が多い。

[楢崎 2006]巻末の「著者略歴」には、「1950 年　『植物波農法』指導開始。六甲山中でカタカムナの古い文献を見せられ筆写」とある。しかし[第 3 号 : 8]には次のようにある。「さて、カタカムナ文献とは、楢崎皐月が、まだ戦後の混乱期の昭和 24 年初頭、兵庫県六甲山系の金鳥山の頂上に在る俗称狐塚(芦屋道満の墓)の辺にて、偶々会ひ得た平十字氏より、カタカムナの御神体として伝へられた巻物によるものである。」これによればカタカムナとの出会いは昭和 24 年=1949 年ということになる[46]。

楢崎とカタカムナとの出会いは1949年または1950年のこととされることが多いが、これが疑問だとする意見もある。[阿基 1981 : 49]は、楢崎の娘の話として次のように記している。「確かに父が一カ月以上も行方不明となって捜索願を出そうかと騒ぎになったことはあった。しかしそれは(楢崎の金鳥山体験の年とされる)昭和 24～25 年ころではなく、30～31 年ころであった。」これが正しいとすれば、カタカムナとの出会いは通説よりも 5 年ほど遅い 1955～1956 年ということになる。

いずれが正しいかの判断は保留して、楢崎がカタカムナと出会った経緯について見ておくことにしよう。[第 8 号 : 90-101]が詳しいので、それに基づいて示すことにす

---

45 「古史古伝」「超古代文書」などと総称される。

46 [ミキたんまい工房ウェブサイト]の「楢崎皐月氏のプロフィール」には、「昭和 24 年(1949) 1 月から 3 月にかけて兵庫県六甲山山系の金鳥山、俗称狐塚付近の穴居生活中に平十字氏と出会う」とある。

る[47]。

楢崎らは、厳しい寒さの中で２ヵ月以上にわたって穴居して調査を続けていた。当時は今のようなキャンプ用具もなかったため、北海道や満州での経験を活かして穴居の場を選び、床の下に溝を彫り、練炭の排気を床下に通すなどして、防寒のための工夫をしたという。

楢崎らは土地の習慣に従って、近くの狐塚にお供えをしていたのだが、そのお供えはすぐになくなってしまった。あまりに不思議なので、なるべく取りにくいものを備えようということになり、半紙に水飴を塗っておいたのだが、これも半紙を破かずに舐められていたという。とはいえ、いくら見張ってもお供えを食べる者の姿は見えない。後の話になるが、平十字は楢崎と出会ってから、「あれはオレがやったんだ」と語ったという。

やがて金鳥山付近に穴居していた楢崎たちのもとに、猟師姿の平十字が訪れる。平十字は、「楢崎たちが妙なものをしかけたために、森の動物たちが水を飲みに行けなくなって困っているから取り除け」といった意味のことを伝える。翌日、楢崎たちが言われた通りに取り外すと、その夜、再び平十字が訪れ、「お前たちは感心だ」と労をねぎらった。そして、自分が平十字という名前で、父はカタカムナ神社の宮司だと言い、古い巻物を取り出して見せた。その巻物は代々「見たら目が潰れる」と言われてきたもので、「刀のツバや定紋の絵だろうと言った学者があったが、そんなものじゃないんだ」と厳然として言ったという。また、カタカムナの神を祀り伝える家柄は平（ひら）家と食（めし）家であるとも語ったという。

楢崎は巻物の図像を見て、かつて満州において蘆有三老師から聞いていた八鏡文字という言葉がひらめき、「これが八鏡文字ではないか」と考えて写し取ろうという気になった。わけもわからぬ絵を写し取るのは大変な苦労であり、最初は２つの渦巻きを写すのに２時間ほどかかったという。借りれば写すことも比較的容易であったであろうが、ご神体であるという理由で借用は許されなかったらしい。楢崎は、到底写し終わらないのでお宅に伺いたいと申し出るのだが、「険しい山道は大変だから」ということで、それ自体は断られる。しかし楢崎がその巻物の文字（？）を筆写するために、それから二十夜にわたって平十字が通ってきてくれたという。楢崎が書き写している間、平十字は傍らで監視を続けていた。そして、夜の白む前に、ひったくるように巻物を持ち去ったという。

とはいえ、平十字が訪れるのは常に夜というわけではなかったらしい。時には昼間

---

47 楢崎とカタカムナ文献との出会いについては多くの本に記載があるが（[阿基米得 1981][深野一幸 1993][船井幸雄 2004]など）、いずれも[第８号：90-101]を始めとする『相似象学会誌　相似象』の記述に基づいていると見られる。

不意に現れて、あたりの地形を説明し、天孫族（天皇の祖先）とアシア・トウアン（カタカムナの神を祭る一族の主）との戦いを語ったとされている。

[第 3 号 : 8]には次のようにある。「なほ、目下私達（宇野たちのこと‥‥寺石注）は、文献内容の解読にもっぱら従事して居るが、巻物の年代、アジアと、芦屋の地名の関連、カタカムナ神を祭る平家と飯家等々について、公的に追究されることが望ましい。その為には、私達のもって居る資料は、よろこんで提供するつもりである。」

4.6 楢崎グループの活動

[第 7 号 : 115-116]によると、星の理想に対しては、会社内部や組合から猛反発があったという[48]。やむなく星は、南米ペルーにあった私有財産の換金を決意する。しかし 1951 年、ペルーに渡る途中に星はロサンゼルスで急逝してしまう。これにより楢崎グループは孤立することになるが、その後は自ら研究資金を工面して実験を続けたという。

前述のように、終戦直後に楢崎は、彼を頼ってくる部下たちを収容するために、習志野の軍用地の払い下げを受け、農業をやらせていた。そして故郷と連絡のついた者の土地は楢崎が買い取り、帰郷のための費用に持たせていた。その結果、楢崎名義の土地が次第に増えたわけだが、この土地が後年高騰したために、研究資金の調達に役立ったという[49]。

[第 8 号 : 127]には、楢崎を支えた人物の名前が次のように記されている。「終戦後、秘密組織的に率いてきた研究家グループの仲間と、星一氏、辻正信氏[50]、植物波農法時代の同志、千島喜久男氏[51]、桜沢如一氏[52]、牛尾盛保氏[53]、そして、小坂隆男氏[54]ら

---

[48] [阿基 1981 : 44]では、「星新一氏は、自分がちょうど父の仕事を手伝っていた昭和 24 年ごろ、楢崎皐月という人物がいて『酒に電波をかけておいしくする』といった類の研究をしていたことを覚えている、という。社内ではあんな奇妙な研究に金を出してもムダだと批判する者が多かったそうである」と記されている。ただし、この星新一の発言については出典が記されていない。

[49] [第 8 号 : 10]。

[50] 元陸軍大佐で、戦後は参議院議員を務め、ラオスで謎の失踪を遂げた辻政信のことらしい。[阿基 1981 : 32]によれば、楢崎は「ラオスで謎の失踪を遂げた国会議員、辻政信の主宰する自衛同盟という右寄りの団体の中央委員であった」としている。

[51] 岐阜大学教育学部生物学主任を務めた千島喜久男とみられる。生物の自然発生や腸造血説などを含む、いわゆる「千島学説」の提唱者であり、従来の生物学と真っ向から対立した。次に名前が挙げられてい桜沢如一も千島学説の支持者であった。[阿基 1981 : 181-182]によれば、千島喜久男全集の発刊に合わせて雑誌に掲載された記事の

の心ある考古物理学聴講者、及び、唯一人の妹、羽田寿美子氏と、私共相似象学の弟子のみが、僅かに彼を支えて来た。」このうち（少なくとも）千島喜久男や桜沢如一は、学問の世界の常識とは真っ向から対立する主張をした人物であり、その点では楢崎と共感する部分があったことは十分に推測できる。

[楢崎研究所ウェブサイト]の松原喜一による述懐によれば、1951～1952 年ごろ、楢崎は東京方面で「食糧増産推進」講演会を開催していたという。そして 1953 年秋頃、松原は東京の教育文化会館での講演会で化成協会主催の「食糧増産推進セミナー」という講演会に出席して、初めて楢崎と会っている。「植物波農法は既に出来上がっていて、本当に普及できるかどうかという時期でした。参加者は 150～160 人くらいで、先生の顔見知りの方を集められておられたという感じでした」とある。

また「当時、神田神保町の東京大学に向かって右側にあった家を化成協会事務所として借りて活動されていました[55]。化成会の人達が集まって研究していたことを覚えています。“生物の変化生成で成長する”という原語を略して名づけられた“化成会”の

中で、「新理論に期待する楢崎氏の見解」として楢崎自身による文章が掲載されている。

[52] マクロビオティックの創始者として知られる人物だと見られる。カタカムナ文献には原子転換のことが記されているというが、桜沢は原子転換の研究者であるルイ・ケルヴランに大きな影響を与えており、彼の著書を日本語に訳している（[ケルヴラン 1962][ケルヴラン 1963]）。また桜沢自身が原子転換について研究している。なお[阿基 1981 : 175]によれば、桜沢は楢崎らを招へいして、本格的な原子物理学の研究センターを設立しようと考えていたという。

[53] 医学博士で厚生荘病院院長を務めた人物だと見られる。後述するように、[第 8 号 : 145-146]には、宇野たちが牛尾盛保の病院に特別室を用意して、楢崎を入院させようとしたことが記されている。また[第 8 号 : 228]には、牛尾盛保が「入院の懇請に赴いた」と記されている。

[54] どのような人物であるか不明。「小坂隆男氏らの心ある考古物理学聴講者」という表現からは、「考古物理学者」の 1 人とも見られるが、後述するように [第 8 号 : 145] には、「万策尽き、絶望的な状態にあった時、たまたま、小坂隆男氏の尽力により服用された特殊薬が効を奏し‥‥」とあるので、医学あるいは薬学の関係者である可能性もある。

[55] [楢崎研究所ウェブサイト]の松原喜一による述懐によれば、その事務所には様々な機械を作る部屋や事務所があり、化成会の人達ばかりでなく、様々なグループの方が集まって研修する部屋など 8 畳間の部屋が 5 部屋くらいあり、かなり広かったらしい。その頃、三鷹にすごい事業所があり、今の新日鉄、当時の日本重工業の研究グループの人達もここで裏づけの研究をやっていたという。

人達は，それは、それはすごいメンバーで化け物のような方達ばかりで僕達では一言も話ができない方ばかりですよ。大変な人脈で、政治家、大学教授、実業界の大物等、特に星製薬の星一氏は楢崎先生の財政支援された方ですが、そういうグループの方がここで研究されていた」とある[56]。そしてインタビュアーの言葉として「その頃、松原さんは楢崎先生をはじめ化成会の人達のことを“これまで軍隊の教育を受けていた体験から、何とすごいことを考えている人達だなあ”と感じていたという」と続いている。

[第 7 号：115-116]には、1955（昭和 30）年に研究成果の一部を植物波農法として発表したとある。しかし[ミキたんまい工房ウェブサイト]の「楢崎皐月氏のプロフィール」には、「昭和 25 年（1950）　「植物波農法」の指導を始める」とある[57]。

植物波農法は、一時的にはかなりの影響を与えたらしい。[阿基 1981：36]によると、1956 年に新日本文学会が第 1 回農民文学賞を募集した時の入選作に『燃焼』という小説がある。東京の町田市周辺で実際に起こった「波農法」事件を純朴な左翼青年の目を通して描いた作品だが、この波農法とは、楢崎が提案した植物波農法のことだという。植物波農法は一時的にかなりの広がりを見せたが、その際に政治的に左翼と結び付くこともあれば[58]、右翼と結び付くこともあったらしい[59]。

とはいえ、植物波農法の拡大が一時的なものに終わってしまった理由について[第 7 号：115-116]では、化学肥料や農薬の使用による多収穫農法を推進した農林省側の方針との対立や、新聞や警察をあげての強引な弾圧などをあげている。[阿基 1981：43]は、右翼と左翼の対立に巻き込まれた植物波農法の行方について、「やがて国と化学資本の推進する近代農法に両方とも駆逐されてしまうのである」としている。[阿基 1981：122]にはさらに次のように述べられている。「昭和 30 年当時かなりの支持を得たはずの植物波農法が、あっという間につぶれてしまったのは、なにも官憲や左翼系農民の妨害のせいばかりではない。農民たちが多収穫をあせるあまり目先の小さな技術にのみとらわれてしまったことにあると考えられる。」「楢崎が各地をまわって直接

---

56 この内容は化成会について、時期を特定せずに紹介したものと捉えるべきであろう。星一は 1951 年に死亡しているので、松原が研究に加わったと思われる 1956～1957 年当時の状況であるとは考えられない。

57 「発表」以前に「指導」が開始されていたとは考えにくい。もしも後者が正しいとするならば、一部の研究成果の発表は 1950 年またはそれ以前ということになるだろう。

58 [阿基 1981：28-40]では具体的に左翼との関係を指摘している。

59 [阿基 1981：40-43]によれば、日本共産党らが支持したミチューリン農法に対抗するものとして、右翼が持ち出したのが植物波農法だったという。

指導している間は、まだよかったろう。しかし官憲によってピラミッドの頂点の首がハネられ楢崎の行動に圧力がかかったとき、組織はたちまち総くずれとなった。‥‥ほとんどの中間の指導者がその根本原理を把めていなかったのである。」

[楢崎研究所ウェブサイト]の松原喜一による述懐には次のようにある。なお、この内容は 1956～1957 年ごろか、それ以降のことと考えられる[60]。

> その後、3 年後頃から私は化成協会事務所に出入りするようになりましたが、楢崎先生はその当時は食糧増産を命がけでやっておられました。
>
> 最初はお手伝いからはじめましたが、僕が獣医師であるということから、僕に畜産事業推進を考えて『卵の黄身を２つ作る方法があるからやってみろ！』といわれ実験したことがあります。先生の指導どうりにやってみたら本当に黄身が２つある卵ができる。そのとおりできるんですよ。いやはや、驚きましたよ。‥‥‥『でも先生、これでは商品としては売れませんよ！』というと、先生は『加工して売ればよい』とおっしゃる。そのとおりなんですね。カステラなどの原材料として使用すれば黄身の多いおいしいカステラがたくさんできる。今でも上の養鶏場で実際に黄身が２つある卵を採卵させていますよ。その他、豚、にわとり、犬などの健康管理に関する実験や穀類、野菜、果物等の鮮度対象実験などもお手伝いしました。
>
> その頃、化成会の仲間の方で人体波健康法の研究をしておられた海軍出身の医師の徳永さん、林さんと楢崎先生とがよくお話をしていたのを覚えています。

これに続いてインタヴュアーの言葉として、「松原さんの思い出話から、『静電三法』の背景には、戦後の復興にかけた日本人の英知を結集した壮大な研究グループの存在が垣間見られる」と記されている。

[ミキたんまい工房ウェブサイト]の「楢崎皐月氏のプロフィール」には、「昭和 32 年（1957）　『技術専修養成講座』全国静電研究連合会を発足する」とあり、この講座のテキストが『静電三法』であったと考えられる。

[楢崎 2006]巻末の「著者略歴」には、「1958 年　『静電三法』発刊。静電研究会、化成主義文化の活動を本格化する」とある。また[ミキたんまい工房ウェブサイト]の「楢崎皐月氏のプロフィール」にも、「昭和 33 年（1958）　『静電三法技術専修員用テキスト』（植物波農法、物質変成法、人体波健康法）発行」とあり、続いて「昭和 35 年（1960）　『宇宙対向式静電圧印可用電源装置取扱要項』（特殊静電処理機）発行」とある[61]。

60　引用の冒頭に「その後、3 年頃から」とあるが、松原が楢崎と出会ったのが 1953 年の秋頃とされているので、おおよそ 1956 年の秋頃かそれ以降のことだと考えられる。

61 最近、イヤシロチに関する情報を積極的に発信している船井幸雄は、1960 年ごろ

5 相似象学会～晩年（1960 年ごろ～1974 年ごろ）

5.1 カタカムナ文献の解読

楢崎が、いつ頃からカタカムナ文献の解読に本格的に取り組んだのかについては、具体的な手掛かりがない。前述のように、平十字と出会ってカタカムナ文献を筆写したのは一般には 1949～1950 年ごろとされているが、楢崎の娘の発言に基づいて 1955～1956 年ごろのことだと推定する説もある。他に手がかりがないため、いずれが正しいのかを判断することは困難だが、カタカムナ文字と呼ばれる特殊な文字を筆写してすぐに解読できたわけではないらしい。

数少ない手がかりの１つだが、[楢崎 2006]巻末の「著者略歴」には「1964 年　カタカムナ図像の解読、考古物理学の研究を本格的に始める」とある。また[ミキたんまい工房ウェブサイト]の「楢崎皐月氏のプロフィール」には、「昭和 41 年（1966）『日本の第一次文明期の特徴[62]』＜従来の沈黙を破り、昭和 19 年～24 年に得た先住古代文明（カタカムナ）の知識について語り始める＞」とある。続いて「昭和 43 年（1968）「古事記」等の古文書の読解を始める」とある。

いずれにせよ、解読は 1960 年代の中盤以降ということになるが、1950 年代の後半は植物波農法の普及に尽力していたと見られるので、カタカムナ文献の解読が 1960 年代まで持ち越されたと考えるのは、無理な解釈ではないであろう。

時期は不明だが、その後、楢崎はカタカムナの一通りの解読に成功したとされている。『相似象学会誌　相似象』には、楢崎が筆写したカタカムナの文字が掲載され、その読み方が示された上で解説もなされている。

楢崎が示したカタカムナの文字の読み方は、実は一通りではなく、一つの文字に対して複数の読み方が可能となる。従って、その解読方法が正しいかどうかについて判断するのは非常に難しい。とはいえ、楢崎はその後もこのカタカムナを極めて重視しており、その姿勢は一貫している。

5.2 後継者探し

カタカムナ文献の一応の解読を成し遂げたのが 1960 年代だとすると、楢崎は 60 代になっている。解読の成果が大きいものであり、また大いに役立つものだと考えた楢崎は、その内容を伝えるべき後継者を探す方法を考えたらしい。カタカムナ文献の内

にカタカムナと出会ったとしているので、ちょうどこの頃ということになる。なお、船井のイヤシロチ論については[寺石 2009]を参照。

[62] 前のかぎかっこ（『）は原文についていない。なお原文では、かぎかっこは一重。「日本の第一次文明期の特徴」とあるのは書名であろうか。

容は一般常識と大きくかけ離れており、また知的理解だけでは及ばない点も少なくない。それにふさわしい後継者を見つけるのは容易ではなかったと思われるが、伝えるために時間がかかることを考えると、できるだけ早く見つける必要も感じていたであろう。結論から言えば、楢崎が後継者として見出したのは、宇野多美恵であった。

[第 8 号 : 22]によれば、自らの死期を悟った楢崎は、カタカムナの直観物理の仕上げと伝授のために集中することを決意し、長年の科学技術の指導からは一切離れることを誓っていたという。

[第 8 号 : 149]によると[63]、楢崎は 1969 年に文部省教育会館で連続講演会を開く。ここで、長年にわたる研究の成果の一端を発表することになるのだが、実はこれは、広く後継者を求めるためにしかけた網でもあったという。しかし、期待に応える人物はなかなか得られなかった。

この連続講演会の第 6 回目に演壇に立った彼は、「いつにない強い電圧」を感じ、それを発している女性の姿を認めることになる。この女性が、彼の後継者とされ、また『相似象学会誌　相似象』の文章の大部分を事実上、執筆していた宇野多美恵であった。楢崎は帰りのエレベーターの中で再び宇野に会うのだが、彼女から即答に窮する 3 つの質問を受け、衝撃を覚えたという。彼はその時のひらめきで、宇野を後継者（「実験の相手」という表現を用いている）とすることを決断する。こうして後継者が得られたことから、楢崎はその時点で連続講演を打ち切ってしまう。実際に、その時点で連続講演を打ち切ったのだとすれば、この講演が後継者を探すためのものであったことを端的に物語っていると考えてよいであろう[64]。

『相似象学会誌　相似象』を発行してきた相似象学会とは、もともとは、この宇野を中心とした婦人たちの部門（グループ）であった。当初は婦人たちの部門だけでなく、8 部門（それぞれの部門を「天然会[65]」と称する）が結成される予定になっており、婦人部門はその 8 部門の中の 1 つでしかなかった。しかし現実には、他の 7 部門は活動を起こさなかったことから、結果として動き出したのが婦人部門だけだった

---

63 他の大半の号と同様、第 8 号も宇野の執筆と見られる。楢崎が宇野を見出し、後継者とした経緯が、宇野本人によって語られているという意味では、他の事柄以上に客観性に欠けることは否めない。しかし他の資料が存在しないため、第 8 号に頼らざるを得ないという事情もある。

64 [ミキたんまい工房ウェブサイト]の「楢崎皐月氏のプロフィール」には、「昭和 44 年（1969） 12 月 4 日宇野多美江恵女史と出会う」とある。

65 「天然」という言葉が示す範囲は、一般に「自然科学」などに使われている「自然」におおよそ相当するといっても差し支えないであろう。ただし、そこに込められているニュアンスは、一般の理解とは大きく異なる。

のだという[66]。ちなみに、予定されていた8部門とは、(1)考古物理（カタカムナ文献）研究、(2)生化学（人体波健康法）研究、(3)天然農法（植物波農法）研究、(4)天然食研究、(5)情報整序作業、(6)特殊技術研究ストック、(7)図書整理、機関誌発行、そして(8)婦人部門である。これら天然会の発足は、1970年のことだったらしい[67]。

とはいえ、他の7部門は「活動を起こさなかった」わけではなく、実は当初から、本当に立ち上げよう（活動を起こそう）としたのは婦人部門だけだったかのような記述も見られる。それによれば、楢崎は、自らが女性を後継者として選んだことについて周囲の誤解を避けるため、上記のような8部門（天然会）を結成するという大芝居を打ったのだという[68]。

この婦人部門は、中心人物である宇野の名前をとって宇野天然会と称した。この宇野天然会が1970年に『相似象学会誌　相似象』を創刊し、第3号発行に際して相似象学会に改称したらしい[69]。そしてこの際に、会員は婦人に限られなくなったものと見られる。初期の『相似象学会誌　相似象』では、「婦人」「女性」といった言葉を多く目にし、事情を知らない者を驚かせることになるが、これは会の成り立ちを考慮すれば、むしろ当然のことだといえる。

---

66 [第8号 : 7註1]。

67 [ミキたんまい工房ウェブサイト]の「楢崎皐月氏のプロフィール」には、「昭和45年（1970）6月11日企画された単位ごとの「天然会」を発足」とある。

68 [第8号 : 150]。

69 第8号を読むと、「宇野天然会」が会誌を発行し、第2号発刊を機会に「相似象学会」に改称したと記されている（[第8号 : 7]）。実際に筆者の所有する第2号（第8版、2005年5月9日発行）の奥書を見ると、編集者・発行者は宇野多美恵、発行所は相似象学会事務局となっている。（再版の際に、「かなづかい」を第7号に準じて改めたことも記されている（[第2号 : 152]）。

しかし[第3号 : 170]（編集後記）には、「なほ、私達は昨年10月、女性の勉強会（宇野天然会）として発足したが、会誌第3号から、「相似象学会」に、発展的に改称した」とあり、これに従えば、改称は第3号からのはずである。

筆者の所有する創刊号を見ると、目次の後に「1970年10月　宇野天然会発行」の文字がある。また第2号の目次にも「宇野天然会」という文字が見られることからすれば、第2号までが宇野天然会であった可能性が高い。第8号にある「第2号発刊を機会に」は、「第2号発刊後に」という意味であろう。

筆者が所有する第2号の版では、奥書が変更されたものと推測される。また、当初は記されていた「宇野天然会の目的と規約」が削除され、「相似象学会について」が掲載されたものと推測される。

創刊号に掲載されている「宇野天然会の目的と規約」には、「宇野天然会は、専ら婦人を対象にした、高速度教養を図る相似方式の勉強会であります。婦人の知性の遅れは、民族の後進性に連なるもので、本会の目的は、知的水準の高い母性を養成することにありますが‥‥」などと記されている。そして会員は「婦人」に限られており、男性は会誌の講読ができるだけとされていた。

第 2 号の「相似象学会について」においても、「本会は、会誌『相似象』を発刊し、知的水準の高い母性の養成によって、民族の優生化と、人類文化の軌道修正を志すものであります」としており、この会が「婦人」のための会であることが明記されている。ただし、「会員は婦人には限りません」という文も加えられている。そして宇野は編集後記において「人間の勉強に、本来、男女の差がある筈は無い。唯、私達は、自分が女である。男の方や他人を教えようとするのではなく、先ず、自分自身が勉強しましょう、という気持ちなのであって‥‥」としている[70]。

5. 3 家族

楢崎は自分自身についてすら多くを語らなかったらしく、ましてや家族についての情報は少ない。時期が特定できない話が多いのだが、ここでまとめて家族に関する情報を記しておく。

楢崎が結婚した経緯や時期は不明である。しかし[第 8 号 : 8]によると、楢崎は息子を戦争中に失っている。また[第 8 号 : 89]によれば、楢崎が満州で出会った蘆有三が、楢崎の娘に会っていることが記されているし[71]、[阿基 1981 : 46-48]によれば、娘は満州時代（1943～1945 年ごろ）の記憶をもっている。従って、楢崎が結婚したのは太平洋戦争の開戦以前だったと考えられる。[第 8 号 : 8]によると、妻の名は時代、長男は朝弥、長女は広子だという。しかし[楢崎 2006]の「発刊にあたって」には、「石田博子（旧姓　楢崎）」（下線は寺石）と記されている。

「結婚生活あるいは家庭生活が幸福か不幸か」といったことを、他人がうかがい知ることは難しい。しかし『相似象学会誌　相似象』では、楢崎の結婚が「不幸」だったとして、具体的な事例が示されている。特に強調されているのは、家族が楢崎の研究に対してまったく理解を示さなかったことである。

[第 8 号 : 102-103]には、楢崎の述懐が次のように記されている。「無駄なことに大

---

70 [第 2 号 : 151]。

71 「娘の供へた手造りの紙人形を、老師（蘆有三のこと‥‥寺石注）は敬意を表して祭壇の天皇位にあげてくれたこと。子ども心に感激して、お礼に日本の歌を唄った幼い娘の頭をなでながら、蘆有三は目を細め、相好をくづして喜んだこと‥‥」などと記されている（[第 8 号 : 89]）。

金を浪費し、経済能力が無い。いつボロを出し、醜態をさらけ、家族まで大恥をかかされるかと思うとゾオッとする。今のうちに病院に入れた方がよい‥‥という論理で、夫の欠陥をカバーしてくれてる剣幕だ。研究グループの人々も僕の精神分裂を助長する一味として蔑み、満州以来の部下の出入りまで禁じてしまった。」楢崎は、実際に精神病院へ行けば家族の言い分の方が通ってしまうだろうと考え、以後は抗弁することをやめてしまったという。

[第 8 号 : 136]によれば、家族は楢崎の書きかけの原稿を捨ててしまうなど、事実とすれば楢崎そして彼の研究に対しては相当にひどい扱いをしていたらしい。楢崎自身が筆写したカタカムナの原本などの貴重な資料が捨てられたこともあったという[72]。

家族が、晩年の楢崎にどのような態度をとったかについては、次項（**5. 4**）を参照のこと。なお、楢崎の妻については、次のような記述もある。

[第 8 号 : 126]には、「師（楢崎のこと‥‥寺石注）は、その妻子が研究家の家族として全く無理解なタイプであった事を折にふれ嘆じていたが、その因の不幸な結婚については語らなかった。師の語らぬ事を詮索する気のなかった私共が師の結婚の真相を知ったのは逝去後の事であった」とある。

[第 8 号 : 230]には、「彼は一児をもうけた後、ある事情から、夫人の拒否にあい、爾来、『プラスのエントロピーの性』（セックス）とは縁のない生活であった」とある。

5. 4 晩年

晩年の楢崎は、カタカムナ研究とその成果の伝授に没頭していたが、かつての科学技術の研究を再度行おうという気持ちも持っていた。[第 8 号 : 22]によれば、彼を盟主と仰いできた部下たちの要請を抑え切ることはできず、最晩年は今一度、陣頭指揮に立たざるを得ない気持ちになっていたという。

とはいえ楢崎の体調はかなり悪く、思うように行動することは難しかったと見られる。[第 8 号 : 152]によれば、楢崎は体調が悪い中、自宅のあった千葉県の習志野から相似象学会のあった渋谷近くの神泉まで通って指導を続けたという。（自宅では家人の理解が得られなかったためらしい。）自宅近くで利用した駅も、最も近い津田沼駅ではなく、少しでも階段の少ない幕張駅を利用しなければならないほど体調は悪かった。彼は万一に備え、胸のポケットには電話番号を書き記した名刺を入れていたが、そこに記されていたのは自宅ではなく相似象学会の電話番号だったという。

[第 8 号:116]によれば、宇野が楢崎に最後に会ったのは 1973 年 11 月 22 日のこと。楢崎は軽い風邪とのことだったが、その後 8 ヵ月の間、病に伏せることになる。その

---

72 [第 8 号 : 136]によれば、この「最も貴重な紙屑」は、楢崎の晩年になって楢崎家の物置の鶏糞肥料袋の中に丸め込まれているのが発見されている。

間、宇野は一度の面会も許されなかったという。

[第 8 号 : 145-146]によれば、牛尾盛保の病院[73]に特別室を用意して、楢崎を入院させようとしたのだが、家人から厳しく拒否されたという。また宇野が楢崎を入院させるように懇請したが、家人から拒否されたとも記されている。

[第 8 号 : 236]によれば、楢崎の妹である羽田寿美子は、兄を入院させるように家人に懇請したが、やはり家人は拒否したという。その状況を見て、楢崎は「人事をつくして天命をまつ」の心境だと告げたが、妹は「ちっとも人事なんか、つくされていないじゃないの？」と抗弁したという。

[第 8 号 : 145]には次のように記されている。「万策尽き、絶望的な状態にあった時、たまたま、小坂隆男氏[74]の尽力により服用された特殊薬が効を奏し、師は自筆の礼状を小坂氏に送り、聞きは乗り切れたかに見え、私共も愁眉を開きかけた事があった。」しかし、十分に回復することはなかったらしい。

楢崎の死亡は、1974 年 7 月 31 日午前 8 時[75]。75 歳。[第 8 号 : 145]には、最後は呼吸困難と記されている。また[第 8 号 : 146]には、死因は老人性結核とある。

[第 8 号 : 116]によれば、宇野たち相似象学会のメンバーは、楢崎の葬儀にも列席させてもらえなかったという。

5. 5 没後

楢崎の生前から、相似象学会は宇野のリードで運営されていたらしい。楢崎の没後も、相似象学会は宇野を中心に運営され、楢崎の研究成果を世に問うていくことになる。

前述したように、晩年の楢崎は、かつての科学技術の研究を再度行おうという気持ちも持っていたらしい。それは彼の部下たちの希望によるものであったが、その希望は楢崎の死によって叶えられないものとなってしまう。

[第 8 号 : 82]には次のように記されている[76]。「彼（楢崎のこと‥‥寺石注）のやり方は、研究テーマによって、グループの中から適当な担当者を決め、指示は与えるが

---

73 前述のように、牛尾は厚生荘病院院長を務めた人物と見られるので、厚生荘病院のことであろう。

74 前述のように、どのような人物であるかは不明だが、この文からは医学あるいは薬学の関係者のようにも理解できる。

75 [楢崎 2006]巻末の「著者略歴」にも「1974 年　7 月 31 日没」とある。[ミキたんまい工房ウェブサイト]の「楢崎皐月氏のプロフィール」にも、「昭和 49 年（1974）　7 月 31 日 75 歳で死去、生涯を閉じる」とある。

76 一部は前出。

存分に研究させ、彼一人が全体を総括し、必要以外に、メンバー相互の横の連絡はもたせなかった。（中略）彼一人が表に立ち、全責任を以って一切を呑みこみ、三十年間トラブルを起さず、メンバーの能力を最高に発揮させる事に成功し、最も能率よく研究成果をあげ得たのであったが、同時に、彼の死と共に、グループの機能は停止し、彼の特異な研究の全貌は知る由もない。」

参考文献・参考ウェブサイト

＊ 本文および注における「第〇号」という記載は、すべて『相似象学会誌　相似象』の号数である。

阿基米得 1981　『謎のカタカムナ文明－秘教科学の最終黙示』徳間書店
宇野多美恵編 1970　『相似象学会誌　相似象』第 1 号
宇野多美恵編 1971　『相似象学会誌　相似象』第 2 号
宇野多美恵編 1971a　『相似象学会誌　相似象』第 3 号
宇野多美恵編 1972　『相似象学会誌　相似象』第 4 号
宇野多美恵編 1973　『相似象学会誌　相似象』第 5 号
宇野多美恵編 1973　『相似象学会誌　相似象』第 6 号
宇野多美恵編 1974　『相似象学会誌　相似象』第 7 号
宇野多美恵編 1975　『相似象学会誌　相似象』第 8 号
宇野多美恵編 1979　『相似象学会誌　相似象』第 9 号
宇野多美恵編 1980　『相似象学会誌　相似象』第 10 号
宇野多美恵編 1980　『潜象物理研究　相似象学会誌　相似象』第 10 号
宇野多美恵編 1981　『潜象物理研究　相似象学会誌　相似象』第 10 号別冊
＜サヌキ・アワ＞（性）のサトリについて
宇野多美恵編 1984　『潜象物理研究　相似象学会誌　相似象』特集号
ゲーテ「ファウスト」と＜カタカムナ＞
宇野多美恵編 1985　『潜象物理研究　相似象学会誌　相似象』第 11 号別冊
感受性について（その 1）
宇野多美恵編 1986　『潜象物理研究　相似象学会誌　相似象』第 11 号別冊
感受性について（その 2）
宇野多美恵編 1987　『潜象物理研究　相似象学会誌　相似象』第 11 号別冊
感受性について（その 3）
宇野多美恵編 1988　『潜象物理研究　相似象学会誌　相似象』第 11 号別冊
感受性について（その 4）
宇野多美恵編 1989　『潜象物理研究　相似象学会誌　相似象』第 11 号別冊

感受性について（補遺その 1）
宇野多美恵編 1990　『潜象物理研究　相似象学会誌　相似象』第 11 号別冊
感受性について（補遺その 2）
宇野多美恵編 1992　『潜象物理研究　相似象学会誌　相似象』第 11 号別冊
感受性について（補遺その 3）
宇野多美恵編 1993　『潜象物理研究　相似象学会誌　相似象』第 11 号別冊
感受性について（補遺その 4）
宇野多美恵編 1994　『相似象学会誌　相似象』第 11 号
宇野多美恵編 1995　『相似象学会誌　相似象』第 12 号
宇野多美恵編 1997　『相似象学会誌　相似象』第 13 号
宇野多美恵編 2001　『相似象学会誌　相似象』第 14 号
宇野多美恵編 2003　『相似象学会誌　相似象』第 15 号
宇野多美恵編 2004　『相似象学会誌　相似象』第 16 号
ケルヴラン、C. L. 1962　『生体の中の原子転換』日本 CI 協会
ケルヴラン、C. L. 1963　『自然の中の原子転換』日本 CI 協会
寺石悦章 2007　「船井幸雄『人間学』の展開」、
『四日市大学総合政策学部論集』第 6 巻第 1･2 合併号、pp.1-19
寺石悦章 2008　「船井幸雄の聖地論」
『四日市大学総合政策学部論集』第 7 巻第 1･2 合併号、pp.23-39
寺石悦章 2009　「船井幸雄の『イヤシロチ探訪セミナー』」、
『場所をめぐる宗教的集合記憶と観光的文化資源に関する宗教学的研究（平成 18 年度～平成 21 年度科学研究費補助金（基盤研究（B））研究成果報告書、山中弘研究代表）』、pp.78-94
寺石悦章 2010　「楢崎皐月に関する資料について」
『四日市大学総合政策学部論集』第 8 巻第 1･2 合併号（掲載予定）
楢崎皐月 2006　『静電三法』シーエムシー技術開発株式会社
深野一幸 1993　『超科学書「カタカムナ」の謎』廣済堂
船井幸雄 2004　『イヤシロチ』評言社
船井幸雄 2005　『イヤシロチⅡ』評言社
松原喜一 1981　『摂動』松原喜一
松原喜一 1981a　『植物波』松原喜一

楢崎研究所　http://www.narasaki-inst.com/index.htm
有限会社ミキたんまい工房　http://www.tanmai.co.jp/ktkmn/narasaki.html